

梅鶯仏教壮年

第67号
2009年
2月22日

梅鶯仏壮定期総会

3月28日(土)

午後6時より

役員会

同日

午後4時より

*当初の日程が変更となりました。ご了承下さい。

いだかれて

ありとも知らず

おろかにも

われ反抗す

大いなるみ手に

様

九条武子

(九条武子さまは西本願寺の第二十二代光瑞門主の妹で、お念仏を悦ばれての四十歳という短い生涯でしたが、お残しになられた歌は現在でも多くの人に親しまれ、また仏教婦人会を育てられた方としても慕われています)

インド仏跡巡拝の旅 ⑤

― 釈尊の聖地を訪ねて ―

副会長 森勝昭

2月6日(6日目)

ポカラで一日滞在。

6時30分起床、ホテル屋上より、朝日が昇るのを寒さをこらえて、6時50分頃から高い山から順に日が当たって来る。7時に太陽が顔を出す。ご来光しい眺めだった。

ポカラ市内見学、チベット難民キャンプ、寺院など参詣。伊吹山より少し高い(1500m)山からヒマラヤ山脈など360度の絶景は、来てみないと口では表現できないほどすばらしい感動を受けた。

夕食はバイキング他にそうめん、味噌汁をいただいた。

2月7日(7日目)

6時起床、7時朝食、8時出発。ポカラからネパールの首都カトマンズまで飛行機で40分。ここネパールは、世界唯一のヒンズー王国ですが、ヒンズー教と仏教が混ざり合い、見事な調和を保って



います。

40以上の民族と話される言語の数も70にのぼります。

の街の様子、ポカラ、カトマンズの街の美しさを、道、店の前などインドより美しく掃除されていた。経済的には、インドからの援助で成り立っている。

米、麦など高い山麓まで開墾した、段々畑、棚田が美しく整地されていた。

カトマンズ本願寺参拝。重誓偈をみんなでつとめ、法話を聴聞した。

夕食はネパール料理専門店「民族舞踏を見ながらのさようならパーティー、今回は小生も腹の調子も良く、食べ物、飲み物も節制が利いた

カトマンズ露天



カトマンズ本願寺堂内



カトマンズ本願寺前

のか？順調な仏跡めぐりであった。カトマンズの街中、バザー(露天)、物を売る人、見る人、売り手共に元気で活力を感じた。

題材法

○正信偈を味わう⑩

偈は、120の句でなるお正信
別れていて、前半は、後半に
迦様の教えに基づき、その悦
びが詠まれており、後半は
お釈迦様の教えを伝えて下
さった七高僧の方々の教え
（論釈）に基づき、その悦
びが詠まれており、後半は
以前にもお話しを致しまし
た。

実は今日の4句で、前半
の最後の部分になります。
二年前から始めました。
「正信偈を味わう」も、
「ようやくこころまで来たの
か」という思いと、「もう
ここまで来たのか」という
両方の思いが交錯します。
皆さんはいかがでしょう
か。

弥陀仏本願念仏
邪見驕慢愚衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

まず今日の4句
を分かりやすく意
訳しますと、「阿
弥陀如来様のご本
願でありますお念



仏のみ教えは、よこしまに
しか見ようとし、ない邪見と
呼ばれる人や、驕（おご）
りたかぶりの強い驕慢な人
達にとつては、それを信じ
て受け入れることは、はな
はだ難しいことです。
この難しいさは他に比較す
るものがないほどに難しい
ものであります」というよ
うな意味になります。

○ちよつと話がちがう？
少し思い出して欲しいの
ですが、前回までに味わつ
てきた句では、お釈迦様の
説かれた阿彌陀さまの教え
は、あらゆる人が、みなひ
としく救われることのでき
る法であることと述べられ
てきました。

「本願を信じて念仏もう
せ」ということだけで救
われる、ただそのこと一つで救
われ、これほどやさしい教えはな
いはずですよ。ですから「易
行道」とも呼ばれます。

とこのころが、かん
じんの最後のところ
ろにきて、たとえ
邪見や驕慢の人達
とはいえ、信心を



受け容れることが難しいと
あるのです。しかもその難
しさは「これにすぎたるは
なし」というのです。
なし」といふ裏切られたよう
な感じがしませんか？いささ
戸惑いをおぼえます。さ
念仏申すことが、本願を信じて
ずかしいというのでし
か。

○医者との関係
以前あるお医者さんのこ
んな話を聞いたことがあ
ります。
「病気を治すために必要
なことは、まず医者が患者
から信頼されることです。
患者が医者を疑っている間
は、けつしてよい治療なん
かできません」と。

いわけゆる医者との信
頼関係であり、病人が医者
の言葉をよくしに聞いて
いる間はだめなものです。
けれどももつと難しいの
は、本当は病気の「自
分は病氣なんかじゃない」
と傲慢に信じ込んで
でいる人ではない
でしょうか。

まずこの人は医
者の所へは来ませ



んから、救いようがありません。
○救われようのない人達
さとりを開かれたお釈迦様
のことに、自分を勝手に
しに聞いて、自分勝手によこ
の阿彌陀様の願いは通じて
ません。これが「邪見」と呼
ばれる人です。

「仏教は古い教えで、科学
の時代には通用しない」「宗
教を必要とするのは弱い人間
だ」「などと知識人ぶつて言う
人がいますが、これは自分の
迷いの姿に気付かないおごり
の姿です。この人も阿彌陀様
の願いは聞こえてきません。
これが「驕慢」と呼ばれる
人です。

特に「驕慢」はあらゆる悪
の根源だとも、經典には書か
れています。
このように見ますと、「な
るほどそんな人達まで救うの
は無理だよ」なんて思いま
す。

けれどもはたして、救われ
ようのない「そんな
人達」とは、一体だ
れのことなのでしょ
うか。

以下次号
1月例会住職法話より

